

女子大國文

第百六十九号

令和三年九月発行

女子大國文

第百六十九号

令和三年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十九号

令和三年九月十五日 印刷
令和三年九月三十日 発行

〒605-8585 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼 京都女子大学国文学会
発行者

電話 〇五五三一九〇七六
FAX 〇五五三一九二二〇
振替 〇〇〇一五一一一四

〒605-8585 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五四一四一〇八代
FAX 〇五四三二六二八二

泉鏡花「愛と婚姻」の再検討 …………… 峯村 至津子（一）

濃尾地震と西国札所総出開帳と生人形 …………… 中前 正志（二九）

—— 資料紹介 『西国三十三番及御詠歌観音靈驗記』 ——

冰青居藏品図録（古筆切編）—— 私撰集（二）—— …… 池尾 和也（六四）

〈資料紹介〉谷崎潤一郎「魔術師」原稿および周辺資料 …… 稲垣 あやか（九五）

—— 翻刻・解説 ——

〔小特集・普賢保之先生退職記念〕

年譜・著述目録等 …………… 普賢保之（八五）

退職して思うこと …………… 普賢保之（九五）

彙報 …………… （九五）

京都女子大学国文学会

彙報

○女子大國文第一六九号をお届けします。

○昨年度に続き、二〇二一年度も新型コロナウイルス感染症の流行が依然として熾烈を極めているため、学科の行事にもさまざまな影響が出ています。ただし、これまでの経験を踏まえ、一部実施できたことは、まだしも幸いという状況です。

以下の行事についても、例年と形態は異なる可能性があります
が、後期の開催を模索中です。

新入生歓迎行事（能楽鑑賞会） 九月十四日（火）

公開講座 十月二十九日（金）

○普賢保之先生をお送りする教員・卒業生・修了生からの辞を掲載しました。

○優秀論文発表会（オンライン開催）の卒業論文要旨・体験記、および行事に参加しての感想文を掲載しました。

研究室だより

○永年、国文学科の一員として学生の指導にあたってくださった
仏教学の普賢保之教授が三月末で定年退職となりました。
温かで柔らかな先生の聲咳に接する機会がなくなることは非

常に残念ではありますが、京都女子大学とのご縁は今後も続くと伺っております。今後も国文学科のためにご尽力いただけると思いますと、頼もしいかぎりであります。

○四月より普賢先生の後任として、中西俊英准教授をお迎えすることができました。ご専門は仏教学です。本号に着任のご挨拶をいただいております。

○山中延之先生が、四月からの一年間、国内研修のため京都大学に出でおられます。

○宮崎三世先生が京都大学での国内研修を終えられ、お戻りになられました。今後、研修の成果を授業やご論文においてお示しくださることでしよう。

○本年度の文学部国文学科主任、および国文学会代表幹事は中島和歌子先生です。峯村至津子先生、池原陽斉先生とともに、国文学科・国文学会の運営に尽力されておられます。

二〇二一年度国文学会行事（前期）

○新入生学科ガイダンス

四月六日（火） 午前九時より

於J201・J224（クラス毎に教室を分けて実施）

○優秀論文発表会

五月八日（土） 午後一時より（オンライン開催）

〈卒業論文〉

『赤人集』における『萬葉集』享受の一樣相

—「暮闇」「春草土」の特異な訓読を中心として—

尾藤真友子氏

『岩屋の草子』考

—男主人公の交代と物語の成長について— 田邊 彩乃氏

「さよ姫」における善友譚、大施譚の影響の可能性について

—竜宮の如意宝珠に着目して— 中川奈央子氏

宋詩に登場する猫について

—陸游を中心に— 新保あゆみ氏

温かな染香人 普賢保之先生

中前 正志

宗教部発行『菩提樹』第三十七号収載の「生きる力」の中で、普賢先生は、「私は『染香人』^{ぜんしょうにん}という言葉が好きです」と明かされたうえで、その言葉の出てくる親鸞聖人『浄土和讃』の一首

染香人のその身には 香気^{こうけ}あるがごとくなり

これをすなはちなづけてぞ 香光^{こうこう}莊嚴^{しょうごん}とまうすなる

を挙げ、「香に染まった人は、常に香しい香りを漂わせているように、阿弥陀仏の教えを拠り所とする人、つまり、念仏者はいつも仏の香しい智慧の光でかざられているから、香という智慧に飾られた人、という意味です」、さらに、「念仏者は阿弥陀仏の智慧に染まった人であり、その智慧を漂わせる人であるというので」と解説されている。右より前には、親鸞聖人『一念多念文意』の中の記述を引用して、「私たちが阿弥陀仏の智慧に染まったからといって、私たちが煩惱をもった凡夫でなくなるといっているではありません。凡夫は凡夫のままです。智慧をいただくことにより一層凡夫であることが知らされるのです。仏様のようになるというわけではありません。自分のありのままの姿が分かる人になるということです」とも。

そして、本年三月三十一日に発行された『菩提樹』第三十九号には、「若き染香人たち」と題する文章を特別寄稿されている。「私は仏教学を担当する教員ですが、知識だけではなく仏教の真髓を捉え、実生活で実践する多くの学生達との出逢いがありました。彼女たちを見てみると、染香人そのものだと思っています。これまで本学で沢山の染香人との出逢いがありました。その中の数人を紹介しています」『菩提樹』第三十九号「はじめに」とされるものである。本学における普賢先生の十四年間の、一つの集大成だとも言えようか。

東日本大震災で甚大な被害を受けた東北地方の出身で、その震災の年に卒業した、種々の困難に苦悩しつつもそれを乗り越えようとしている染香人、いじめや不当な差別を受けて育ち、世の中に対して憎悪の念しか持てなかったのが、入学後に友人達の優しさに触れて本当の強さを身につけていった染香人、就職活動での重役面談で自らの親鸞理解を堂々と展開し、「重役の方も意外とよくご存じでした」と言っただけの染香人、『正像末和讃』の一首に触れてはじめて、自分ではどうすることもできない「自分の中の黒い感情」、そして、そういう醜い心を持った自分自身を受け入れることのできた染香人、普賢先生のところによくやって来て、時には先生が閉口されるほどに矢継ぎ早に粘り強く質問する

学生であったのが、卒業後は本願寺に就職し、さらには幸せな母親の顔を見せてくれたという染香人、等等。紹介されているそれぞれのエピソードなどには、大変ほほ笑ましく、そして胸を打つものがある。と同時に、それら染香人ひとりひとりに注がれる普賢先生の温かな眼差しが、ひしひしとふんだんに感じられる。

先生が京都女子大学に着任される直前のある日、同じ仏教学の徳永道雄先生が、後任の普賢先生について「自分が一番信頼する男なんだ」と話されているのを、耳にすることがあった。あの徳永先生がそんな風に仰るとは、いったいどんな方なのだろうと思っていた。しかし、その徳永先生のお言葉を了解するのに何ら時間はかからなかった。特別な何かがあったというわけではないにすぎ、「ああ、なるほど」と納得できた。そのように直感し得た要因の一つは、普賢先生の温かな眼差しにあったのに違いないと思う。以来、入試業務の時も、卒論の試問の時も、何気ない立ち話の時も、そういう先生の眼差しを浴び続けてきた。私たちを見守り導いてくださる、温かな染香人——それが普賢先生なのだ。つくづくとそう実感させられた、先生との十四年間であった。普賢先生には、賜った御恩に深謝申し上げますとともに、これからも私たちを御教導頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

フゲンノシヨウゲキ

坂本 信道

普賢が来る。いな、おわします。

次に来る仏教学を専門とする先生の姓が「普賢」と聞いて衝撃を受けない凡夫はまず皆無であつたらう。ある者は奇蹟とばかり随喜の涙を流し、ある者は冗談だらうなどと罰当たりな雑言を吐いた——はずである（国文学科の学生であれば石川淳の『普賢』を想起した者もいるであらう）。しかし、姓は普賢^{ふげん}、名は保之先^{やすゆき}生は、ほんとうに来られたのであつた。

コワモテで名高かつた（しかし実のところは照れ屋で心優しいこと随一で、含羞の笑顔がこのうえなく魅了的だった）前任者の徳永道雄先生が、君なあ、今度来る普賢君を僕はよう知ってるけど、ほんまに信頼できる男や、とハスキイ・ロウ・ヴォイスでおっしゃる。巧言令色を微塵も持ち合わせていない徳永さんの言^{げん}過つはずはなく、着任された普賢さんは物腰柔らかで、穏やかな人であつた。物事の本質を見抜く力に劣り（浮世に、盆に暗いと呼ぶ）、すぐ調子に乗るわたくしは、その穏やかさにつけこみ、最初のころは若年ながら国文学科の先達として威張っていたのだが、普賢さんがもと相撲部だと知って態度を改めたことは言うま

でもない。おかげで今日のこの日まで無事である。

聞けば普賢さんは大分県は宇佐の産だと言うではないか。わたくしは福岡県の小倉産である。しかも勅使として宇佐八幡宮に向の途次、道鏡によつて脚の腱を斬られたという和氣清麻呂ゆかりの校区で育ち、居住している。同郷というだけで団結したり親近感を持つたりするのは日本人の悪い（良いかもしれない）習性である。宇佐と小倉。これを仏の冥助と言わず何と言おう。大分県と福岡県でどこが同郷といぶかしむ近代の愚昧な人々に教えてあげよう。古代、宇佐と小倉はともに豊前国なのだよ。相撲部での失策を回復するべく、同郷人（対関西陣営ということでも広く言え九州人）という点からアプローチを試みることにした。幸いこの戦術は功を奏したようである。今日のこの日までわたくしは息災である。

涙ぐましい努力の結果、どうにかこうにか、初期のわたくしの高慢な振る舞いが大事に至ること無く、普賢さんは寛容に接してください、その後、いろいろ一緒に仕事をした。差し障りがあつて詳しくは書けないが、双方、ひそかに融通し合つて大学の激務を凌いだ。権力に阿諛るわたくしは、普賢さんの宗教部長という要職の威を平身低頭してお借りしたことも多々。さすが豊前国繋がりには偉大である。いや、そうではなくて、ここは永年大学の樞

要なる職階にあつて、国文学科のために力を貸してくださった普賢さんの偉大さを讃える場であつた。あやうく間違えるところだつた。とにもかくにも、個人的には非常にありがたく助かつた。何事も、餅は餅屋であることを実感した。

学生引率で鞍馬寺にも同行した。元相撲部も元蹴球部も、寄る年波と日ごろの軟弱生活のため、歩くという選択肢は無く、昇りはもちろん鋼索軌条にした。体力はなくてもケーブルカーに乗るぐらいの資金は潤沢にあるからである。ただし、こうした些少な金の支払い（奢つた、奢られた）で人生の貸し借りを作り、未代まで語り継がれるのもお互い業腹なので、賢人どうし、ここは銘々で支払うことにし、乗車する。榮々到達した頂上で参詣後、下山方法について二人で検討した結果、歩いて降りるという選択をした。思えばこれが増上慢というものである。本来ならば増上慢を戒める立場であらせられる普賢さんが、凡夫とともに徒歩下山という蛮行に及ぶとは。日ごろの修行に問題があつたわれわれの脚と腰が下山後どうなつたかは言うまでもないが、この苦行を経た普賢さんが思いも寄らぬ至言を放つた。「今度は降りもケーブルカーにしましょう」。厳しい筋肉修行によって登山下山の（筋肉の）苦患から救われるのではなく、凡夫は大乗の舟に乗ればよい、ケーブルカーはすなわち大乗の舟。教えにおける比喩

とはこういうものか、と今になって思うのである。

とこうしているうちに月日は流れ、二〇二一年三月尽、衝撃の時は再び訪れ、普賢は国文学科から去つた。深く謝し奉る。爾後も国文学科に冥加あらせたまえ。

※永年お勤めいただいた先生を送る感謝の辞として、一部きわめて不適切な表現・呼称が含まれていますが、執筆された時代の状況、送者の意図を最大限尊重し、かつ被送者の了解の上、原文のまま掲載しています。（執筆者）

普賢先生から学んだこと

平成三十年度博士前期課程修了 小西 洋子

仏教というと一般的には、鎮魂や葬式といったイメージがあるのだろうか。京女に十数年在学していた間、いつも身近に仏教があつたので、仏教の一般的なイメージがあまり分からない。

初めて仏教を学んだのは、京女の中学に入学した時である。もう記憶は曖昧であるが、その時の先生が、仏教は難しいから今は分からないかもしれない、と話されていたことをおぼろげに覚えている。中学・高校では宗教の授業に加え、毎週仏参もあつた。だが、仏教について、これといって深く考えたことはなかった。

きっかけは大学の入学式の日だった。同じく国文学科に進学した中学からの同級生と時々居合わせた。その同級生から「私は、仏教が好きで高校でも宗教委員をやっていた。その時に、大学の『歎異抄』を味わう会」というゼミナールを紹介された。一人で行くのは勇気がいるから、一緒にどう？」と言われた。戸惑いを隠せなかったが、断るのも気が引けて、参加してみることにした。そのゼミナールを担当されていたのが普賢先生だった。

私は、国文学科の一組の配属となった。また遇々、必修科目であった「仏教学Ⅰ」も一組は普賢先生の担当クラスだった。真剣に仏教を学び、仏教について考えはじめたのはこの時からである。仏教は、「すである現実の私」を見ていく。四諦という考え方があ。諦とは、あきらかに現実を見ることである。四諦には、苦諦・集諦・滅諦・道諦がある。このうちの滅諦は、苦の滅したところがさとり（涅槃）であるという意味である。つまり、苦を滅して智慧を得るということを意味している。智慧は、物事をありのままに見る能力のことである。

これは一見すると、仏に成る者が獲得する特殊な能力のようで、自分とは関係のないことのように感じる。だが最近、この物事をありのままに見る能力を身近に感じることがあった。

修士論文を執筆していた時、答えを出すことのできない問題が

あった。その問題について、修士論文では、最も無難であろうという考え方を示しておいた。問題はその後だった。思いもよらず研究を続けることになった。

研究をこれから進めるために、その問題について、何らかの答えを出しておかなければならないと思っていた。焦りもあった。修士論文の時に示した無難な方向で考えたことを結論として、それ以後この問題については解決しようと思った。

しかし、昨年、ある事実が発覚した。その事実が、これまで考えていた無難な方向を根本から覆すことだった。私は自分の研究に対してあまり執着心がないと思っていた。だが、さすがに、修士論文からおおよそ四年間考えていたことを白紙にするのは、勇気のいることだった。新しい方向で考えるためには、その事実を掘り下げて、また一から調べ直さなければならない。

自問自答した時、これまで考えていた無難な方向というのは、これから先に進めていく上で都合の良い方向だった。改めてこれまで集めた資料を見た時、その方向で論を進めるために都合の良いものを選び、強引にその方向に当てはめようとしていたことに気が付いた。同時に、その発覚した事実を受け入れれば、これまで生じていた矛盾がすべて解消されることが分かった。何年掛けるような、間違っていたものは仕方がない。たとえ時間が掛かって

も、初めから調べ直すべきだという決心ができた。

この一件以来、私にとって研究とは、仏教という滅諦、つまり智慧を得ることのように感じている。何かを明らかにしようとする時、目の前の資料を自分の価値観で取捨選択してはならない。すべてを受け入れ、ありのままを見た時、自ずと答えがあるような気がした。

大それたことを述べてしまったが、研究に於いてありのままを見るところというのは、言い換えると、作品や資料を正確に読解、解釈するということである。それができれば苦勞しないのであるが、それができないから苦勞していることを痛感したのは言うまでもない。

『歎異抄』十三条には、「害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」という親鸞聖人の言葉がある。『歎異抄』の中でも、特に印象に残っている言葉である。言葉の通りに捉えると「殺すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう」といった意になるだろう。誤解を招きかねないが、私はこの言葉を好んでいる。

親鸞聖人は、この言葉のもう少し後に、「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」とも述べている。つまり、人間はしかるべき縁があれば、どのような行いもし得るといふこ

とで、殺人もその一つだということだ。

私は、これらの言葉は、縁起という考え方と通じていて、「私」という存在は条件次第でどうにでも変わることを意味しているという解釈している。十三条は、それを殺人という極端な例で喻えている。条件が重なれば、自分の欲望や狂気はいつ暴走してもおかしくない。十三条に記される言葉は、そういった自分の危うさに付き、それに歯止めを掛ける言葉として捉えることもできる。しかし同時に、前向きな解釈をすることもできる。

私が、仏教を深く学ぶことになったそのきっかけは、入学式の日に遇々居合わせた同級生である。『歎異抄』を味わう会^①は、ほとんど毎週開催され、学部を卒業するまで所属した。脱線することの方が多く、冗談を言い合って馬鹿笑いばかりしていた。その中には本質を突くような言葉がたくさんあった。

当時は大学院に進学するとは思ってもなく、普通に就職するつもりだった。なぜ未だ懲りずに研究を続けているのか、自分でも分からない。ただ、京女を離れた今、物事を常識にとらわれずに見ることを、無意識のうちに仏教から学んでいたことに気付くことが多い。

今の私があるのは、普賢先生から仏教を学んだからである。すべてのご縁に本当に感謝している。

普賢先生の思い出

二〇一八年度卒業生 中村 明日香

私にとって普賢先生は、心の師であり、私と阿弥仏を繋いで下さった縁でもある。とはいえ私は、3回生の前期まで特別仏教学というものに興味があつたわけではなかつた。じいちゃんがいつも拝んでるやつの内容やるんか、くらいの感覚だつた。私が仏教学に深く触れることになつたのは、普賢先生が説明していた、親鸞聖人の教えがきっかけである。その当時の私は、自分の中の悪い感情（妬みや八つ当たりなどの純粋な悪意）に振り回されて、疲れ切つていた。高校生の頃からずっと、自分の中の悪い感情を抱いてはいけないものだど強迫観念を抱いており、けれども色々な人に悪い感情を持つてしまい、そのことが嫌で申し訳なくて仕方なかつたのだ。そんな悩んでばかりの私の心に光を差し、道を示してくれたのが仏教学であり、その縁を結んでくれた方が、普賢先生である。普賢先生は授業の中で、阿弥陀仏の教えによつて妬み嫉みなど、自分の悪いところが見える。それ自体は辛いことだが、同時に自分自身という凡夫のあり方をしっかりと知ることができる安堵があり、そんな凡夫である私をありのまま受け入れてくれることこそが、阿弥陀仏の教えの要であるという趣

旨の話をされていた。この説明を聞いた私は、私の中の悪い感情は、もしかして否定しなくて良いのかもしれない、と驚くほどストンと心の中に動かない安堵を得た。普賢先生を通して私の心にも、阿弥陀仏の無碍の光が差し込まれたのである。そしてその光は、見えづらくなることはあれども、差し込まなくなることはなく、私を包んでくれている。

そんな私からみた普賢先生は、ある種の達観を持っている方だ。例えば、教員生活の中で出会つた学生さんとの話をされている時、その時に感じた感情を気負わずに話していた。その感情は、良いものばかりだけではなく、どちらかと言えばネガティブな感情の場合もあつた。普通であれば、自分のネガティブな感情を話すことには、もつと躊躇いを持つ人が多いのではないかと思う。特に先生という立場や、話す相手が学生という、何十歳と下の人間という条件があれば尚更だ。しかし普賢先生にはそれが感じられなかつた。ネガティブな感情であっても、ネガティブなことを感じる必要があるのは当たり前で、それはそれで仕方ないと考えているのだと思つた。これは、開き直りではなく、凡夫であることを受け入れているからだろう。悪意を持つても、選択を間違えたと思つて後悔しても、凡夫だからそういうものだど受け止めているのだと感じる。道徳的・倫理的には悪くても、思つてし

まうものは仕方がないことだと、自然と思っているのだろうなと思う。だからこそあつけらかんとした感じを覚えるのかもしれない。そしてそこには、清々しさがある。こんな風に生きていいのだという安心感がある。迷って良いのか、こんな腹黒い私で良いのかと、まるで迷わないで、腹になんの悪感情のない私でいられることがあるのだという、ある種の驕りを抱いている状態に気付いていないことの多い、つまるところ凡夫であることを受け止めている途中の私には、まだまだあれない姿だ。

よく先生は、思い悩んでばかりの私を染香人とやって下さる。私は嬉しいなど面映くなると同時に、こんなに黒い部分ばかりなのに、そのような過大な言葉を頂いて良いのだろうかという思いも抱えていた。しかし先生は、阿弥陀仏の光によって明らかにされた、私の中にある沢山の黒い感情に、足掻きながら向き合おうとする私を肯定し、その姿こそが染香人と言って下さっていたのだと、改めて気が付いた。黒い感情の多寡ではなく、阿弥陀仏のまま救うという安堵によって、黒い感情があることに向き合いい、受け入れようとするこそが、きっと染香人の第一歩なのだ。そして、感情をそのまま受け入れて、そこからより良いと思う行動を選び実践していこうすることが、染香人としての生き方として相応しいと思う。悪い感情に従って行動しては、造悪

無碍になってしまふから。私はそうやって自分を受け入れ、沢山考えて生きていきたい。普賢先生のおかげで、私は阿弥陀仏の絶対的な肯定と、染香人として生きていくという、人生の太い指針を得ることができたのだ。

そしてもう一つ、私を楽にしてくれる言葉を、普賢先生は下さっている。それは「明日香さんは生きるのが下手だ」という言葉である。悪人正機と同じように、ちよつと誤解を受けそうな言葉である。しかし、私にとっては失敗や後悔、似たような悩みでぐるぐるしている自分に気が付いてがっかりした時に「まあ、生きるの下手くそだから、仕方がないかあ」と、ホッと息を吐ける言葉であり、ぼちぼちやろうと少し前向きになれる、ずっと大切にしたい言葉だ。

私も普賢先生と同じくらい年齢になった時、私と同じく悩める人に、こんな風な考え方、生き方があるのだなど、悩みを軽くする一助を差し出せるような人間になりたい。

中西先生をお迎えして

着任のご挨拶

中西 俊英

仏教学の普賢先生の後任の中西俊英と申します。京都女子大学には四年前から非常勤としてお世話になっておりましたが、今年度より准教授として着任させていただきました。新型コロナウイルス感染症の流行がなかなか収まらない中で着任となり、学生の方々とほとんど会うこともなく、パソコンとにらめっこする日々を過ごしております。

私は東京大学インド哲学仏教学研究室というところの出身で、国文学が専門ではなく仏教学が専門です。ですので、まずは少しだけ私の経歴や専門領域の紹介をさせていただきます。

仏教学は多様な言語の文献が研究対象となるため、出身研究室では、学部時代に語学（梵・蔵・漢）を一通り訓練した後、大学院への進学の際に地域や時代を選択するという流れでした。私の場合は、インド（あるいは西域）で編集された『華嚴経』という大乘経典が、文化の異なる地域、具体的には中国の唐でどのように解釈され、どのような教理と世界観を作り出していったのか、という点を中心テーマとし、朝鮮半島や日本への影響も含めなが

ら研究をすすめています。

そもそも私が『華嚴経』に興味を抱いたきっかけは、イスラーム学者である井筒俊彦氏の『コスモスとアンチコスモス…東洋哲学のために』（岩波書店、一九八九年）という本でして、この本の中では『華嚴経』解釈の展開の中で形成された哲学的な理論が、イスラームのスーフイズムと比較されてあざやかに解釈されています。文献学的にはいくつかの問題も含んではいますが、『華嚴経』解釈における哲学的な理論をなかなか理解できなかった私にとっては、すこぶる斬新だったのです。

『華嚴経』は編集経典なので多様な思想が包含されています。このような経典の場合は、目のつけどころによって経典全体の見方も変わってきます。また、瞑想中の神秘的体験なども、しばしば登場します。注釈を読むと分かるのですが、『華嚴経』を解釈した人々（主として東アジアの人々）は、自らがそれまで身につけてきた教養や思想によって、不可思議な記述を何らかの形で理解しようとしていました。仏教の教理や中国の伝統思想、さらには自らの修行体験、様々なものをよりどころとして『華嚴経』を研究してきたのです。彼らが苦心したあとを歴史的・思想的に辿りながら、解釈の多様性を解明してゆくこと、それと同時に、時代や地域におうじた仏教の様々なあり方を知ることができるの

が、個人的な研究の醍醐味です。

また、仏教を知る、仏教を理解するということは、私個人のルーツを知るという意味でも興味深いことなみです。私自身は浄土真宗のお寺の出身で、生まれた時から身のまわりに仏教があり、ある意味では、生まれながらに信仰や生き方を決定づけられておりました。大学に入学し、さらには大学院に進学し、研究生活の中で仏教を客観的に考え、当たり前のように身近に存在する仏教を一八〇度異なる視点から捉えなおすことで、自分自身の生き方を次第に整理することができたように思えます。

日本学術振興会特別研究員や復旦大学（中国・上海）の訪問学者、奈良の東大寺の研究員などを経て、この四月から京都女子大学文学部国文学科に迎えていただきました。実は、今年米寿を迎える私の祖母が京都女子大学国文学科を卒業しておりまして、不思議なご縁を感じております。祖母はたいへん喜んでくれました。

国文学科は京都女子大学の中でも歴史のある学科ということ、身の引き締まる思いでいっぱいです。文学に与えた仏教の影響が大きいことは言うまでもありませんが、文学と仏教との関連を新たな気持ちで学びなおすことで、自分自身の研究にもつながる視点を獲得できればとわくわくしています。また、授業をと

して学生のみなさんと学びあいながら、国文学科、京都女子大学に貢献してゆきたいと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

優秀論文発表会（五月八日）

『赤人集』における『萬葉集』享受の様相

—「暮闇」「春草之」の特異な訓読を中心として—

尾藤 真友子

〈論文要旨〉

『赤人集』は、『萬葉集』巻十の前半部分を抄出したと思しき排列を持つ平安時代中期成立の私家集であるが、『萬葉集』漢字本文と齟齬する訓読が少なくない。本稿は齟齬が生じた理由の一端を明らかにするため、上代から中古にかけての歌語の変遷という観点から検討を加えたものである。

本稿で検討を加えたのは、特異な訓読が顕著に見える以下の二首である。

① 春草之繁吾恋大海方往浪之千恵積

〔萬葉集〕巻十・二九二〇

はるたてばしげしわがこひわたつみのたつしらなみにとへ
ぞまされる 『赤人集』西・一九七

はるたてばしげしわがこひわたつうみのたつしら波にちへ
ぞまされる (同・書・七八)

はるたてばしげきわが恋わたつうみのたつしら波のちえぞ
まされる (同・陽・九一)

② 木晚之暮闇有尔一云有者霍公鳥何處乎家登鳴渡良武

『萬葉集』卷十・一九四八

こがくれてゆふぐれなるをほとぎすいづこをいへとなき
わたるらん 『赤人集』西・二二八

こがくれてゆふぐれなるに時鳥いづくをいつとなきわたる
らん (同・陽・一一九)

まず①で注目したのは『萬葉集』では「ゆふやみ」、『赤人集』
では「ゆふぐれ」と訓読される「暮闇」の訓読である。『萬葉集』
と八代集に存する両語の用例数を比較すると、「ゆふやみ」は七
首、「ゆふぐれ」は百十首と圧倒的な差があり、「ゆふやみ」の詠
歌例が乏しいことが分かる。さらに平安時代の「ゆふやみ」の詠
歌例には、『好忠集』所収の「源順百首」の「ゆふやみにあまの
いさり火見えつるはまかきのしまのほたるなりけり」(『好忠集』
源順百首・夏・四九六)や『元輔集』の「夕やみの月まつ程にお

しと思ふ秋のふかくもなりにけるかな」(『元輔集』一九七)等が
あるが、源順、清原元輔が共に『萬葉集』訓読に携わった梨壺の
五人であることや、順の「あまのいさり火」が『萬葉集』所収歌
を踏まえた表現であることから、平安時代における「ゆふやみ」
詠歌例は『萬葉集』の影響を受ける可能性が高いことを指摘し
た。さらに『後撰集』の「ゆふやみ」詠歌例である「夕闇は道も
見えねど旧里は本来し駒にまかせてぞ来る」(『後撰集』卷十三・
恋五・九七八)は、『大和物語』にも収められており、本文は「夕
されば道も見えねどふるさととは本来し駒にまかせてぞゆく」(『大
和物語』第五十六段)と、初句「夕闇は」が「夕されば」へ変化
していた。伝承による変遷か、意図的な改変であるかは不明だ
が、「ゆふやみ」が平安時代において一般性に乏しい歌語であつ
たため、夕方になることを示す意味で『萬葉集』以来用いられて
きた「夕されば」に表現が変化したものと考えられる。

対して「ゆふぐれ」は逢瀬の時間が近いことから特別な時間で
あるという認識が『古今集』の頃から存在し、『古今集』所収の
「夕暮れは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」(『古
今集』卷十一・恋一・四八四)のように「人恋しさ」を詠むこと
が多い歌語であった。さらに『古今集』所収の「ひぐらしのなく
山ざとの夕暮は風よりほかに訪ふ人もなし」(『古今集』卷四・秋

上・二〇五)のように「ひぐらし」等の自然素材と組み合わせる詠むことで「欠落感」や「哀感」を詠出させる役割も持っていた。そのため「ゆふぐれ」は伝統的なイメージが歌人の間で共有、継承されていた歌語であり、平安時代において一般的に用いられる歌語であったことが理解できる。

続いて、②で注目したのは『萬葉集』では「はるくさの」、『赤人集』では「はるたてば」と訓読される「春草之」の訓読である。「はるくさ」は『萬葉集』に五首の詠歌例が存在するが、『萬葉集』以降は平安後期の『行宗集』や末期の『殷富門院大輔集』に至るまで全く用例が存在しない歌語である。平安後期になって詠まれるようになったのは『萬葉集』の影響を受けている可能性が高く、それは『行宗集』、『殷富門院大輔集』どちらも万葉語や万葉的表現が十二世紀以降に復活するきっかけとなった『堀河百首』以降の成立であること、『行宗集』は『堀河百首』を継承した極めて早い例であること、殷富門院大輔の例は『萬葉集』所収の「はるくさ」詠に通じる発想があるためである。さらに、『寛平御時后宮歌合』(夏歌・二十・五二・右)や『元真集』(九四)に「なつくさ」と「しげし」を詠み合わせた例が存在するように、「しげし」を導く語として「はるくさ」が用いられることは平安時代の表現として違和感があった。以上の二点から、「はる

くさ」は平安時代中期において一般性に乏しい歌語であることが理解できる。

「はるたてば」は「春立つ」から派生した表現で、「春立つ」は人麻呂が詠んで以来、平安時代にも継承された表現であり、季節＋「立つ」の詠歌例は三代集に十八例存在する。「平安時代において季節の訪れを示す表現として一般的であったのは、「はるくれば」や「あきはきにけり」等の季節と動詞「来(く)」を組み合わせたものであったが、『赤人集』において訓読となったのは「はるたてば」であった。『赤人集』所収の範囲で季節の訪れを示す動詞は「さる」「くる」「たつ」「なる」の四種計二十一例あるが、そのうち九首が季節＋「たつ」の形で表現され、さらに九首中六首が他の動詞から「たつ」への改変であった。このような訓読の傾向があることから、季節＋「立つ」は『赤人集』編者が好んだ表現である可能性の高いことを指摘した。

以上、二首の検討から『赤人集』の訓読は、『萬葉集』の詠み合わせ等を考慮しつつも、漢字本文に即して訓読することより、当代の表現を優先して訓読として使用する傾向があり、齟齬が生じたのは『萬葉集』を平安時代の和歌として受け入れようとした結果であると言える。そして『萬葉集』の漢字本文と齟齬する訓読は、『赤人集』における『萬葉集』享受の一樣相を呈している

と言える。

〈卒業論文執筆体験記〉

卒業論文で皆さんが一番悩むことがテーマ決めではないかと思
いますので、私がテーマを決定したきっかけを簡単にお伝えした
と思います。少しでも参考になれば幸いです。

私の卒業論文のテーマである『萬葉集』享受史について知った
のは三回生の国文学特殊講義でした。私はこの分野を初めて勉強
した時、本当に難しく理解することができませんでした。今振
り返ってみれば理解できないことに悔しさを感じ、「絶対に理解
したい」と思ったことが論文のテーマにするきっかけだったと思
います。自分で勉強していく内に、少しずつ理解できるようにな
ったことで、『萬葉集』享受史の奥深さ、面白さを知り、気付
いた時にはこの分野で論文を書きたいと思っていました。最初は
ただ理解したい、という単純な気持ちからでした。正直、大学入
学前は『源氏物語』について勉強し、論文を書くんだと思ってい
ましたし、およそ四年前、大学に入学したばかりの自分に「卒業
論文は上代の分野で書くことになるよ」と伝えたとしても、あの
頃の自分は絶対に信じないと思います。それくらいやりたいこと
は変わっていくものだと思います。

もしテーマにする分野や物語、和歌、小説等々が思い付かない
のであれば、今まで受けた講義の内容や日常生活にあるものを
疑ってみることをお勧めします。自分が普段使っている言葉、勉
強した又は好きな物語や小説を今一度「どうして?」「なぜ?」
と注意深く気に掛け、読んでみると何か気になることができるか
もしれません。

私は卒業論文を書くことができて本当に良かったと思っています。
それは、今後自分の人生において卒業論文のような長い文章
を執筆すること、そして日本文学と長期間向き合う時間というの
は恐らくやってこないだろうと思うからです。そして書き上げた
時のような大きな達成感を感じることもなかなかできないと思っ
からです。

卒業論文は大学卒業のために必須の存在ではありますが、良い
経験になりますしきつと楽しいと感じる瞬間があると思いますの
で、皆さんお体に気を付けつつ、頑張ってみてください。応援して
ます!

『岩屋の草子』考

―男主人公の交代と物語の成長について―

田邊 彩乃

〈論文要旨〉

本稿において、考察の対象とするのは、室町時代成立とされる御伽草子である『岩屋の草子』である。諸本は主に古本系、流布本系、異本系があるが、話の大筋は変わらず、違いとして挙げられるのは、実母を亡くした時の姫君の年齢や、物語末尾に登場人物たちのその後が詳述されるかどうかといった点程度だ。物語は、姫君が実母を亡くし継母から疎まれ、男君に救い出され幸福になる点で、継子譚としての筋書きをなぞっている。しかし、同系統の作品と『岩屋の草子』には異なる点がある。それは、姫君を救い出すのが、継母によって海に捨てられる前に婚約している四位少将ではなく、今まで物語に全く登場していない二位中将という人物であることだ。また、海に捨てられた際は岩の上で五日間を過ごし、その後海士あまに助けられるものの岩屋で四年間を過ごし、都に戻った後も、二位中将が勘当されたり、嫁比べが行われたりするなど、受難を多く経験した後に、大団円を迎える構成には、ちぐはぐな印象を受ける。

先行研究では、姫君一人に対し男主人公が二人いることについて、『岩屋の草子』成立に関わるとし、論じているが、定説となっていないものがないため、さらなる検討が必要だと思われる。そこで本論文では、男主人公の交代を中心に、それが『岩屋の草子』の構成をどのように成長させたかについて論じた。

まず、もともと四位少将という婚約者がいたにも関わらず、姫君を幸福にするのは、今まで全く登場していなかった二位中将という別人物であるという男主人公の交代の問題について、二人の心理描写に注目し、その違いがどのような意味を持つものなのか考察する。

四位少将については、まず、姫君が父の任官に伴って移動するため、離れ離れになる場面で、

少将は御婿なれば、淀まで御送りし給ふ。さて、少将、姫君の御乳母にの給ふは、「舟の内、波の上、筑紫まで遙ぐとおはしまさん事覚束無く思ひ奉る。対の屋をば都に留め置き給へ」と申せ

(中略)

少将力及び給はず、名残惜しみ給ふ。既に鱸綱解き、御船出しければ、少将は泣くく京へ帰り給ふ。

(引用は新大系『室町物語集』上。二一九から二二〇頁。傍

線は論文作成者による)

とある。姫君と離れることを避けようとし、それができなかつたことで悲しむ様子が描かれている。このまま、四位少将は姫君と再会することがなく、姫君が行方不明になったと聞くと、深く悲しみ、すぐに出家をする。出家した後も姫君の菩提を厚く弔い、姫君の父と再会した際には一緒に深く悲しむ。こうした行動や心理には、姫君を恋焦がれていることが理由になっているのだろう。

一方、二位中将は、「こは如何に」と思ひて、胸の内さゝめきて「(同。一三三八頁)とある場面や、「うち見つるより、などやらん、ゆかしくて、一蓮の身とぞ思ふなり」(同。二四〇頁)と部下に語る場面、結婚後も姫君の出自が明らかでないために、「今は何をか隠させ給ふべき。ゐ中の人にてはおはすまじ。海土あまの娘とも覚えぬ。ありのまゝに語り給へ」(同。二五八頁)と姫君に訴える場面に心理描写が見られる。しかし、それらは姫君を知ろうとするためであり、嫁比べの際に隠れて様子を見ながら、姫君と添い遂げようと決心する場面である。「よし弾かずは、な引そ。唯蓮台の上にならんまで、離れまじき物を」(同。二五四頁)において、姫君の夫としての覚悟のようなものが読み取れるだけで、姫君のために出家してしまう四位少将とは心情から行動ある

いは覚悟へと向かう、その向かい方が異なっているようである。

姫君一人に対し、男君が二人存在し、主人公が定まっている『源氏物語』、『狭衣物語』を参照すると、それらでは主人公とされる男君の方に内面的な心理描写が多いことが確認された。したがって、四位少将は物語後半に登場しないにも関わらず、前半では男主人公として描かれていると考えた。

そして、先行研究では男主人公が二人いることについて、『岩屋の草子』成立に関わるとしていることから、現存の物語の特徴を整理したい。

『岩屋の草子』では姫君について、以下のように冒頭で紹介している。

智恵・才覚世に勝れ、大聖文殊とも言ひつべし。琴、琵琶、歌の道、人にすぐれさせ給ひけり。管絃の方をろかならずして、歌も詠み、絵描き、花結び、要文・法文心につけ、人にすぐれて無常を觀じ給ひけり。(同。二二七頁。傍線は

論文作成者による)

傍線を付した部分は具体的な仏教用語が使われていることを示している。具体的な仏教用語は物語全編を通じ、多用されている。こうした特徴は中世に書かれた『かるかや』や『一心二河白道』等説教集や古浄瑠璃で見ることができる。

ほかに四位少将が出家をしてしまう部分では、中世の作品と推定される『しのびね』、『あきぎり』、『かばね尋ぬる宮』等と同じ悲恋遁世譚の要素が指摘でき、嫁比べが行われる部分では、中世御伽草子の『はな世の姫』、『鉢かづき』にも同様の展開があることを指摘できる。

そして写本の一つである奈良絵本では、挿絵が多く構図が絵巻式であり、画面の中に人物の名、会話の言葉、本文の一部が書かれていることを、先行研究で「室町時代の絵巻によく見られるところである」(『古奈良絵本集』一、松本隆信著、「解題」、四頁)と指摘されている。

このように見ていくと、『岩屋の草子』に見られる特徴はどれも、中世の作品の要素と一致することが確認された。

次に、『岩屋の草子』における受難の程度の重さと、その後の大団円へ向かう展開のちぐはぐさについて考察する。なぜここまで受難がひどく、姫君はなかなか幸福になることができないのかという点、姫君の救済者となるべき人物が、実際に働いていないことが確認された。実母は姫君の前に現れ、継母にも取り付くもの、それだけでその後の展開には姿を見せなくなってしまう、父は継母の悪計に気が付くことがなく、出家もできない。婚約者である四位少将は姫君に恋焦がれ出家までするものの、結局姫君

と会うことはない。この展開から、物語前半において、姫君の救済を描こうとはしていないと考えた。

これまで、物語前半にしか登場しない四位少将はそこでは主人公として書かれていたこと、『岩屋の草子』には中世の要素が多く含まれていること、物語前半で姫君の救済を描こうとしていないことを考察してきた。このことを踏まえ、一仮説として、『岩屋の草子』はもともと、悲劇として終わっていたのではないかと考える。

物語がもともとどういう形だったのか考える際に、『いはや』という『風葉和歌集』に六首和歌が残る散逸物語の存在がある。情報が少なく、比べることが難しいが、残っている海士あまのもと岩屋で過ごしたという情報から、全くの無関係ではないと思われる作品である。『いはや』と『岩屋の草子』を比較した際、女君が筑紫へ向かうこと、海士あまの岩屋で過ごすこと、女君が大団円を迎え生まれた若君の袴着を行うことが共通するだが、この三点のうち、二点が物語前半の内容だ。このことから、読み手の関心が悲劇としての要素に向いていて、受難の増補を行う形で後半の物語が足されたと考えられるのではないだろうか。そうして、悲劇としての物語があり、そこから姫君を幸福にしようとする物語が成長していったと考えると、問題にしていた男主人公の交代という部分

において、四位少将より位の高い二位中将という人物が姫君を見
つけ、嫁比べを経て、今までの悲劇とは一転して大団円に向かう
と考えられるのである。

(参考文献)

- ・市古貞次・秋谷治・沢井耐三・田嶋一夫・徳田和夫校注、
『室町物語集』上(新日本古典文学大系²²)、岩波書店、
一九八九年七月二十日。

- ・天理図書館善本叢書^{和書}和書之部編集委員会編、『古奈良繪本集』
二(天理図書館善本叢書^{和書}和書之部第三十七卷)、八木書店、昭
和五十二年三月十四日。

〈卒業論文執筆体験記〉

卒論を書いていて、私が大変だと感じたことは、資料の収集・
保管、校正作業、書式の設定の三点でした。特に大変だったのは
校正作業で、自分の書いた文章とただひたすら向き合い、間違い
を見つけ、ひたすら直す作業の地道さと孤独さに、本文自体は書
き終わったはずなのに、なぜこんなにしんどいのだろうと不思議
に思っていました。

しかしそうした中で、友人や家族、ゼミ生や先生に自分の書こ
うとしていることを話し、『岩屋の草子』のおかしさやおもしろ

さについて共感してもらったり、分かりにくい部分を指摘しても
らったりしたことは、とても有難く、良い刺激になりました。ご
指導いただいた先生のお言葉にはなりますが、卒論を執筆すると
いうことは、非常に長い文章を自分の関心のあるテーマで書ける
こと、そしてそのことを最優先にしてのめり込むことのできるこ
とでもあります。

その仕上げを完璧なものにしたい、という気力で、どうにか最
後まで投げ出さずに校正作業を進め、誤字等の間違いを極力無い
状態にできたことは、自分の誇りにもなりましたし、後悔するこ
とにならなくて本当によかったと思います。卒論は大学生活の集
大成のようなものにもなりますし、ぜひ皆さんにも後悔すること
がないよう、テーマ設定、資料収集、本文の構成、最後の校正作
業まで妥協することなく、極めて行ってほしいと思います。

また、卒論は中古のゼミで書くことになりましたが、大学生活
の中でさまざまな分野で学んだことは財産となり、卒論執筆の際
にも活かされたと思っています。特に本文の書き方については、
いくつも様々なレポートを書いてきたからこそ、調べ方やまとめ
方でどうしていいかわからない、ということがなく、作業を進め
られたのだと思います。

皆さんも、今までのご経験を活かし、自分に自信をもってあき

らめずに、卒論を後悔しないよう完成させてください。応援しています。

「さよ姫」における善友譚、

大施譚の影響の可能性について

―竜宮の如意宝珠に着目して―

中川 奈央子

〈論文要旨〉

室町物語や説経などで知られるさよ姫の物語（以下『さよ姫』と称する）で、姫は亡き父の菩提を弔うために身売りし大蛇の生贄となるが、法華経の読誦により大蛇を蛇身の苦から逃れさせる。広本と略本に大別されている諸伝本の両系統間における、主な違いの一つに、救済された大蛇が姫に差し出す布施物の違いが挙げられる。略本系の伝本ではこがね千両であるのに対し、広本系の伝本では如意宝珠である。それに伴い広本では、姫と別れた嘆きで泣き潰した母の両眼を如意宝珠により開眼させ、貧しくなった家を富貴繁昌させるといふ略本にない結末が見える。

『さよ姫』の物語の形成過程が、諸伝本の本文の比較や説経の担い手から検討されているが、モチーフが何に拠っているのかという点について検討することも可能だろう。『さよ姫』は『私聚

百因縁集』などに類話が見られ、説法場で語られていた話を元とする指摘されている。説経の研究にはそうした法会唱導の場で語られた經典の注釈書や談義書の比喩因縁の話を素材とした可能性を見る必要が述べられたり、外来の物語から素材を得ている可能性が検討されたりしている。卒業論文では、本拠が明らかにされていない、広本のみに見られる大蛇の如意宝珠とその効能の要素に着目し、説法場での広まりという点を考慮しつつ、モチーフの原拠を検討した。

如意宝珠による開眼の要素は、『さよ姫』周辺の類話などには見えないが、漢訳仏典などに見える善友太子あるいは大施菩薩が海中の如意宝珠を得る話に見当たった。『大方便仏報恩経』（以下『報恩経』）巻第四「悪友品第六」、中心部分がそれを抄出したとされる『経律異相』巻第三十二「善友好施求珠喪眼還明二」、『賢愚経』巻第八「大施杼海品第三十五」では、海中に如意宝珠を求めに出た善友太子（『賢愚経』は『報恩経』、『経律異相』とは内容が一部異なり、主人公の名も大施菩薩である。以下、『報恩経』、『経律異相』の善友太子の話は善友譚と総称し、『賢愚経』大施菩薩の話は以下、大施譚と称する）が帰国後、子と別れた悲しみで失明した父母の眼を龍王から得た如意宝珠で明らかにする。如意宝珠で宝をふらせることは『さよ姫』周辺の他の話にも見える

が、如意宝珠による盲目開眼は他に見えず、注目される。昼も夜も子を思つて嘆き悲しみ盲目となる点、再会できたと分かると喜ぶようすなどが一致している。

その他、『さよ姫』で姫に救われた大蛇はさよ姫を故郷の大和の国に送り届けるが、『報恩経』、『経律異相』の善友譚でも善友を龍神が国へ送っている。全体の形式においても、さよ姫は竹生島弁才天に転生する本地物であるが、善友譚、大施譚は釈迦の本生譚であり、仏や神の前生を語るといふ点で共通する。さらに、親の引き留めに反して自らの決意に従い国を去るが帰国して親を喜ばせる構造が一致する。

善友譚・大施譚と『さよ姫』の間には複数の類似部分が見られることを指摘したうえで、影響を与えた可能性、影響を与えるまでの過程を検討した。大施譚は海水を汲み干して龍宮の如意宝珠を取り返す話として『三宝絵』をはじめとし、中世の複数の説話集に引かれ、また、別の室町物語『月王・乙姫物語』への影響が考えられている。善友譚は幸若舞曲『百合若大臣』への影響が指摘されており、中世に広まりがうかがえる。しかし、如意宝珠による開眼の効能はそれらには見えず、可能性としては、『さよ姫』は日本で広まる大施譚（日本の善友譚には龍の如意宝珠が現れないが、大施譚は龍の如意宝珠を取り返す話として伝わる）を媒介

として、漢訳仏典の原典から直接利用したことが考えられる。

唱導資料に目を向けると、海中の如意宝珠を求める話では、慈童女の話が注目される。釈迦の因縁譚であり、善友譚・大施譚と海中の記述が類似している慈童女譚の広まりがうかがえることから、『さよ姫』の形成に関わると考えられている説法の場合においても、善友譚・大施譚が受容されていた可能性が推測される。あるいは、母が引き留めるのに反して子が出て行くという母子の関係性が『さよ姫』と一致し、『さよ姫』の形成過程に関わった可能性が考えられるのではないか。

『さよ姫』では父への孝行が強調される一方、母を悲しませる面があるが、結末では親を歓喜させる善友譚・大施譚と共通すること、さよ姫の母に対する孝も示される意味があると考えられる。

〈在学生へのメッセージ（卒業論文体験記）〉

卒業論文執筆のための準備で苦労した点は、先行研究で未だ明らかになつていなくてかつ学問的に意義のある新知見を提示することでした。どのように検討しどういう結論を導くのかという最終的なテーマを決定することが難しかったです。

先行研究を批評し、論を補足したり否定したりすることが難しいと感じたため、別の観点で論じるという方向にしました。先行

研究を踏まえ当初は諸伝本の比較などで何か言えないかを考えた
り、さよ姫が竹生島弁才天となる理由について示そうと考えたり
していましたが、先行研究で言われていることを確認することに
留まり、先行研究を超えるような新しいことを言える気がしな
かったのです。しかし関連する大蛇や如意宝珠に注目し資料を集
めて読む中で論じられるようなことが見つかりました。最終的な
テーマがなかなか決まらないと論文を完成させられるのか不安に
なりますが、結論を急がずに、広く関係しそうな資料を読み分
析、検討するなど結論を導くことにつながらなくても思いつく
色々な方法を試していくうちに何か言えることが見つかると思
いました。直接論文で扱わなくとも広く資料を見渡して把握して
おくことは論じる上で必要になると思います。私の場合は作品や歴
史背景、法華経や唱導についてなどの知識が不足しており、卒論
の準備段階より前から理解を進めておくべきだったと反省して
います。また、先行研究も、直接研究対象とする作品、話について
の論文でなくとも、どのような方法で論じているかを参考にでき
ることがありました。

一方で、論文の中では小さい問題を扱い、一つのことについて
論じる必要があります。様々な資料を調べていくとどれもテーマ
に関係してくるように思われて取捨選択することに迷いました

が、問題を論じる上で必要かを判断して広げないように注意する
と良いと思います。

資料の収集分析と納得できる結論を考えつくまでに長く時間を
要し、執筆の段階に入ったのが遅く、読み手に伝わるような構
成、表現になつていないか推敲する作業が十分できませんでした。
誤字や文法の誤りも多くなり反省しています。結論が明確に決
まっていなくても一度文章を書いてみると考えを整理でき気づく
こともあるので文章を書く時間を十分取ることが大事だと思います。

資料を集めても、そこからどういうことが言えるのか考えるの
が苦手で苦労しましたが、研究を通して効率性ばかり求めず、一
つのことを深く考える姿勢を学びました。新たに様々な資料の存
在に気づき、それを読んだり、研究の状況やあり方を知ったりす
るのは興味深く印象に残っています。証拠を示し新しいことを論
じることが出来ると面白さを感じました。思うように進まないこ
とも多いかもしれませんが前向きに取り組んでいただけたらと思
います。

宋詩に登場する猫について

―陸游を中心に―

新保 あゆみ

〈論文要旨〉

漢詩には多くの動物が詠まれているが、ネコがどのように詠まれているかということを中心に考察した研究は少なく、その特徴は明らかになっていない。本論文の目的は、ネコの漢詩における詠まれ方の特徴を明らかにすることである。宋代に入るとネコが登場する詩が増えることから宋詩を取り上げ、特に宋代の詩人中で最も多くのネコの詩を詠んだ南宋の陸游に注目した。

まず唐代までの詩文においてネコがどのような動物として詠まれているのかを確認すると、たとえば、初唐の寒山『詩三百三首』一五八（『増訂注釈全唐詩』第五冊、文化芸術出版社）に次のような例があった。

失却斑猫兒^一 斑猫兒を失却し

老鼠困^二飯糶^一 老鼠飯糶を困む

まだら模様のネコがいなくなつたために、ネズミが食料の入つた糶を漁るようになってしまったと詠んでいる。唐代までの詩文においては、このようにネコがネズミを捕らえる動物として登場

する場合がほとんどであった。

次に、宋詩におけるネコに注目すると、北宋の梅堯臣、黄庭堅の詩においても、ネコはネズミを捕らえる動物として登場していた。しかし唐代までの詩文とは異なる点として、詩中にそれ以外のネコの日常的な姿が描写されていることなどが挙げられる。また、南宋の范成大『石湖居士詩集』卷二十九「習閑（閑に習ふ）」『四部叢刊初編縮刷本』六四集部『石湖居士詩集誠齋集』台湾商務印書館、一九六七年九月）には、次のようにある。

……

閑看猫暖眠^二氈褥^一 閑かに看る猫暖かにして氈褥に眠るを

静聽猫寒叫^二竹籬^一 静かに聴く猫寒くして竹籬に叫ぶを

……

この詩は冬の情景を詠んだものだが、冬に敷物の上で暖まって眠るネコとは、まさしく飼い猫の日常的な姿を表したものに他ならないだろう。このように、宋代に入るとネコの日常的な姿を詩に詠むようになるのである。また、ここで注目したいのは、この詩に登場するネコはネズミと関連させずに詠まれているという点である。唐代までの詩文や梅堯臣、黄庭堅の詩において、その多くでネコはネズミを捕らえる動物として登場していた。しかしここでは、ネズミと全く関連させずにネコの日常的な姿が詠まれて

いるのである。

陸游もネコの日常的な姿を詩に詠んでいたが、陸詩には他の詩人の詩とは異なる特徴がいくつかあった。一つは、『劔南詩稿』卷二十三「得_二猫於近村_一以_二雪兒_一名_レ之戲為作_レ詩（猫を近村に得て、雪兒を以て之を名づけ、戯れに為に詩を作る）」（『景印文淵閣四庫全書』第一一六二冊）において、ネコのことを「旧童子」と擬人化したことである。該当箇所を次に挙げる。

似_レ虎能縁_レ木 虎に似て能く木に縁り

如_レ駒不_レ伏_レ轅 駒のごとく轅に伏せず

但知_レ空_二鼠穴_一 但鼠穴を空にすることを知り

無意為_二魚飧_一 無意に魚飧を為す

薄荷時時醉 薄荷に時時酔ひ

氍毹夜夜温 氍毹に夜夜温まる

前生旧童子 前生は旧童子

伴_レ我老_二山村_一 我に伴ひ山村に老いん

「前生」は「前世」と同じで、「現世に生まれ出る前の世」を指す。「旧」には「ふるなじみ。むかしなじみ」の意味がある。「童子」には「子どもの召使い」の意味があり、その役割は、主人につき従って身のまわりの世話をしたり、外出先に同行したりすることである。陸游は「雪兒」というネコのことを、前世ではなじ

み深い幼い召使いだったに違いないと、前世からの縁を思うほど、人間との関係と同じ馴染み深さを感じているのである。

更に、陸游のネコの詩はその半数以上が最晩年の作であり、うち三首にはネコと晩年の寂しさを共にするといったことが詠まれていた。また、「温」や「暖」の語が用いられ、ネコと敷物を共にするといった表現がされている詩が多い。これらのことから、陸游はネコという動物を、晩年の寂しさや温もりを共有してくれる、長年連れ添った若い召使いや家族のような存在として詩に詠んでいたと考えることができるのである。

〈在学生へのメッセージ〉

卒業論文を執筆するにあたり大切なことは、ゼミの仲間や友人と意見交換をし合うことだと思います。ある程度テーマや内容が決定し、文章化ができてきたら、それを同じゼミの仲間や友人と共有してみてください。自分とは異なった視点から課題を捉えてもらうことができ、新しい発見があるのではないかと思います。また、同時に進捗状況についても共有し、今自分はどれくらい書けているのか、これからどのようなことをしていく必要があるのか、といったことを明らかにしていくってください。調査や研究の結果、考察などを文章化するの自分自身ですが、そこに至るま

での過程をすべて一人きりでやる必要はありません。先生方に相談しご指導を仰ぐのは勿論のこと、ゼミの仲間や友人とも意見交換をし合い、自分の考えをより深いものにしていくと良いのではないのでしょうか。

体調管理には十分に留意し、卒業論文執筆に取り組みてください。応援しています。

優秀論文発表会で学んだこと

三回生 松尾 美玖

以前開催された優秀論文発表会は予定が合わず、今回が初の参加となりました。参加する前は卒業論文に取りかかるのはもっと先で、遠い存在であると感じていましたが、終わってみるとこの考えは一変しました。

ひとつの発表が終わるごとに、問題点について多角的な視点を持って挑んでいくことの難しさや、相手により研究内容が伝わるような文章を書くことの重要性を痛感しました。大学に入って詳細な資料や先行研究に触れる機会が多くなりましたが、その資料が正しいとは限らないということを毎日の授業で学びました。この学びが今回の発表会で更に深くなったと感じています。先行研究をなぞるだけでなく、独自の新たな視点で取り組むことは大変

難しいことだと思いますが、その先に新しい気づきや発見を見出すことが論文を書くにあたって重要なことなのだと感じました。

発表後の質疑応答はとても有意義な時間でした。発表を聴いて、自分では気づくことができなかった点の指摘には驚きましたし、その問題点に対してのやり取りも勉強になりました。自分の研究なのだから発表内容に関して熟知しているのは当たり前のように思えますが、いざ自分の卒業論文が出来上がったときに、質問や指摘にきちんと答えられるかは不安です。このような不安をなくすためにもテーマ決め、資料集めなどから気を抜かずに挑まなければならぬと強く感じました。また、今回の発表に関して私は受け身で聴いていた自覚がありました。質疑応答の時間は限られています。些細な疑問でも積極的に質問して理解を深めることが自分の成長にもつながることを改めて感じたので、普段の授業から取り組んでいきたいと思えます。

最後に発表者の方から卒業論文を書くにあたってのアドバイスがありました。今までは卒業論文に対して漠然とテーマを決めて研究してまとめる、といったような曖昧なイメージしかありませんでした。しかし、資料集めの大変さや管理方法、スケジュール管理など、具体的な経験のお話を聴くことができてイメージが鮮

明になったように思います。特に印象的だったのは「資料は紙媒体か電子媒体か」という話です。両方のメリットデメリットを踏まえて、自分に合った形で作業を進めていくのが大切だとおっしゃっていました。大量の資料を管理する方法もあまり詳しく考えていなかったので、付箋を貼ることやファイリングすること、データ上の資料の管理方法など様々なことを知ることができました。私自身、限られた制作時間で、手元の資料がどこに行っただ分からなくなるといふ事態を引き起こしてしまいそうなので、このアドバイスは絶対に忘れずに時間の無駄は極力避けようと思います。

発表者の方は論文執筆の大変さを語ると同時に、やりがいや達成感のお話もされていました。私にとってこんなにも長い期間、ひとつのテーマについて考えるとというのは卒業論文が人生初だと思います。今回、この優秀論文発表会で学んだ多くのことを大切にして挑んでいきたいです。

優秀論文発表会に参加して

三回生 森 思寧

今年の優秀論文発表会は、新型コロナウイルスの影響もあり、zoomでの開催となりました。「PCの前で先輩方の発表を聞き、

果たしてちゃんと理解することができるのだろうか」という不安な気持ちが始まる前にはありましたが、先輩方の論文は興味深い内容ばかりでニュアンスが伝わり難い等の問題もなく、アドバイスも経験に基づいた身になるものをいただき、大変有意義な時間となりました。

私は現在三回生で、卒業論文を書くまでにあまり長い時間はありません。しかし、恥ずかしながら卒業論文にどのように取り組めば良いか、どのような形式のかもほとんど理解しておらず、右も左もわからない中で今回の優秀論文発表会に参加しました。そのような状態でありながらも、先輩方の資料は理路整然としていてわかりやすくまとめられており、要点を絞って発表してくださいとアドバイスをもらって、オンライン上でも集中して聞くことができました。

論文の内容が素晴らしかったのは勿論ですが、特に参考になったのは論文の書き方そのものについてのアドバイスでした。卒業論文を書くにあたって、最初に行う「疑問点を見つける」ことがかなり重要で、なおかつ難しいことだと思えます。実際に、先輩方も苦労されたと伺いました。

どのように疑問点を見つけ出すか、アドバイスとして「とにかく早く取り組むことが大切」だと仰っておりました。それでも、

中には疑問点を改めて考え直したと仰っていた先輩もいらっしゃいました。そのことから、卒業論文は一朝一夕で完成するものではないことを改めて感じ、「三回生のうちから演習を通して、卒業論文に真剣に向き合わなければならない」と強く意識しました。

また、ある先輩は『『莊子』に登場する猫がどのように思われているかについて考察して行く』という、ユニークな着眼点で論文を書いておられました。卒業論文はその重要性から堅いものと思いついていましたが、疑問点は自由なもので良いとわかり、視野を広げることができました。

そして、沢山アドバイスをいただいた中で特に印象深く、皆様仰っていたのが「資料の整理に気を付ける」ということです。卒業論文となると、ネット上には無く図書館に行く必要のある文献ばかりで、必要量もかなり多くあります。それに伴って、必然的にコピーした紙の量も多くなり、中には使わないものもあると聞きました。それらに気を付けて整理しないと、使いたいものをすぐ見つけることができず、限られた時間の中で大幅なロスに繋がると仰っていました。実際に先輩方の使用されていたファイルも画面越しに見させていただき、どのように整理すれば良いかなども教わることができました。卒業論文に集中し、内容をじっくり

と煮詰めるためには、資料の管理も重要だと気付かされました。今回私は初めて優秀論文発表会へ参加したのですが、二回生、一回生の頃から参加しておくべきだったと、少し後悔しました。論文の内容や展開、先輩方のアドバイスは、課題のレポートを書く際にも参考になると感じます。どの回生の方でも必ず得るものがあると思うので、是非一度参加してみてください。

二〇二〇年度(令和二年) 論文題目

博士論文

菅原道真の漢詩文における『莊子』の受容

李 現

黄泉における「死者」の姿の変遷

小原 未波

人麻呂歌集七夕歌群冒頭六首の配列の研究

大隅花緒里

— 男性歌との比較から —

『万葉集』における「女歌」考

遠藤 貴子

— 一九九八番歌の解釈から考える —

— 「葬送」と「仏教」から考える —

「もみじ」における挽歌的表現の変遷

神村哉也子

— 上代と古今集時代の和歌を中心に —

古代びとの死生観の研究〜挽歌の忌避表現から考える〜

『万葉集』に見られる嗅覚表現 — 「にほふ」を中心に —

北畑 真由

『万葉集』雪歌の研究 — 八代集との比較を中心に —

小林 涼香

『万葉集』におけるヨブコドリ

鈴木 静琉

— 「喚」と「呼」の表記を中心に —

『万葉集』の「荒磯」 — 「荒磯」は「荒れた磯」なのか —

田村 美咲

『赤人集』における『万葉集』享受の二様相

尾藤真友子

— 「暮闇」「春草之」の特異な訓読を中心として —

「松浦逍遙歌群」の研究

三野 菜朋

— 歌群間の表現の矛盾に着目して —

卒業論文

上 代

琉球、日本神話の相互関係への提言

岡野 理穂

— 記紀の天地開闢神話・食物起源神話を中心に —

『万葉集』の夢

井上 真希

— 前期万葉から見た相聞夢歌の俗信と漢籍の関係 —

中古

平安時代の物語における涙の意味と価値

新井 雅

『蜻蛉日記』における「前渡り」

黒沢 春花

—道綱の母の身分意識—

竹内 詩乃

「花のなきほど」の季節

田邊 彩乃

—『栄花物語』における初冬の菊—

谷岡 薫

『岩屋の草子』考

西尾 佳純

—男主人公の交代と物語の成長について—

村上 友香

『我身にたどる姫君』女帝考—即位を基点にして—

相原 毬那

『とりかへばや物語』における「契り」描写の効果

足立 桃花

—当時の美の基準から見る「女」の物語—

加藤 寧々

『建礼門院右京大夫集』から見た夢分析

菅原 初音

山城国の歌枕—文人らが見た嵯峨野—

檜前沙也加

和歌における助動詞「らむ」について

—小野小町「あまのすむ」歌の解釈—

慈円が詠む「心の色」について

—西行・定家・良経と比較して—

八代集における月の和歌—釈教部成立以前について—

『百人一首』崇徳院歌について

『古今和歌集』と『万葉集』の桜の歌について

平井 利奈

伊勢大輔考

福田真由子

—『後拾遺和歌集』における役割と「いにしへの」歌を中心に—

藤原定家の「くの空」について

松野里佳子

和歌に詠まれた虎について

南塚 玲那

『新古今和歌集』恋部における配列から見る歌人の役割

渡邊 千智

中世

「猿蟹合戦」—柿の定着と影響—

一貫坂彩奈

磯女像を探る

梅野 珠実

お伽草子『稚児今参り』の尼天狗について

風間 彩乃

古代説話の中の動物—荒ぶる神としての姿から—

櫻原 まい

中世の博雅像—「秘曲伝習説話」にみる—

鈴木 萌生

『今昔物語集』巻二十八第四十話「以外術被盜食瓜語」

鈴木結宇安

から見る神と瓜

「さよ姫」における善友譚、大施譚の影響の可能性について

中川奈央子

—竜宮の如意宝珠に着目して—

鍋島 実李

義孝往生説話について—兄孝賢の位置とその役割—

成田 桃歌

『古今著聞集』における音楽説話の性質—筆筆の役割—

波多野みのり

『長谷雄草紙』における雙六の作用

橋姫―嫉妬と鬼への変化

向井紗也佳

『男色大鑑』巻二の四「玉章は鱸に通はず」考

伊藤未玖子

中世賭博の検討

明石真依子

―「男色」の描き方の工夫―

狂言にみる「わわしい」女について

岡崎 寧々

『男色大鑑』論

白井 智香

狂言の鬼足―山伏と鬼の関係性に焦点を当てて―

奥野 莉央

―若衆の外見美の有限性とその効果について―

中世における天狗の概念―山伏が持ち上げた天狗―

櫻本 花音

岡本綺堂『半七捕物帳』『勘平の死』論

加藤 紗和

中世・近世の資料から探る、狂言における神道と仏教の比較

土田菜々子

―近世文化・近世文学との関連を中心に―

廉承武霊の説話の変遷

福原 千智

阿呆という役が作品に与える効果

崎尾 朋未

太宰治『断崖の錯覚』、その秘匿―純文学の在り方―

橋本 和佳

―近松世話物を中心に―

『男色大鑑』における「永遠の誠」の描き方

重松 里帆

―巻四ノ四を中心に―

『心中天の網島』の独自性

巽 優

―紙屋治兵衛の言動を中心に―

近 世

『夫婦宗論物語』考―所収和歌の意義―

野村 知里

『心中天の網島』論

南部みなみ

小袖模様にもられる文芸意匠

今井菜々恵

―治兵衛の人物像に込められた近松の意図―

蘆庵和歌の研究―連作と教示歌について―

上杉佳奈恵

なぜ原作を想起させる二次創作艶本は人気なのか

林 采佳

良恕法親王詠歌論―古歌の踏襲の面から―

辻本 七海

―艶本 歌川国貞『仮名手本／夜光玉』と

祇園梶子『梶の葉』についての考察

松世有梨奈

歌川国芳『口吸心久莖後編』の上の巻の表現比較を中心に―

松永貞徳論―『延陀丸結題二百首』の検討―

酒造 朋花

落語における天満のイメージとその効果

武士 愛実

近松世話物『心中天の網島』のおさんの人物像

麻生いちご

―「千両みかん」を中心に―

―妻の側面と母の側面―

近代

幸田文「流れる」における梨花

森下 瑞季

—不二子が果たす役割—

坂口安吾「夜長姫と耳男」論—姫の笑顔の正体—
「暁月夜」に於けるヒロイン像
—宿命を持って生まれた子供—

田原 鈴音
出口 美波

武者小路実篤「若き日の思ひ出」論

辻村 悠香

「経つくえ」から読み取る樋口一葉の決意
太宰治『晩年』論—「葉」から読み解く太宰の文学観—

中原 優佳
仲村うめの

—太平洋戦争末期に描かれる若者の成長—

「聖家族」における踊り子の影響について

馬場 彩華

二度書かれた「墮落論」

北山美由紀

谷崎潤一郎「秘密」論—〈魔界〉浅草と女装—

福島奈々花

—坂口安吾「続墮落論」成立の経緯—

『少女の友』における魔性の少女の役割

松尾有希子

川端康成「禽獣」論

山西 枝里

—吉屋信子「わすれなぐさ」の陽子を中心に—

柳原ひかる

—作者自身による作品評価とその死生観—

宮沢賢治「ひかりの素足」論—兄弟が死別した意味—

山田 未帆

萩原朔太郎〈浄罪詩篇〉考—疾患と罪の意識—

浅野 有紀

後期安吾作品に見られる仏教色

山田 未帆

樋口一葉「うつせみ」を読む

宇野 美亜

—「桜の森の満開の下」より—

榎本まひろ

—正雄の描かれ方に着目して—

夢野久作「死後の恋」論—キチガヒ紳士と視点の妙—

榎本まひろ

向田邦子「幸福」論—脚本から小説への歩み—

沖野 美葉

漢文

尾崎翠「こぼろぎ嬢」論

小野 渚彩

—産婆学の暗記者をめぐる考察—

宋詩に登場する猫について—陸游を中心に—

新保あゆみ

樋口一葉「ゆく雲」論—桂次の人物造型—

川瀬 桃子

都良香における孫綽「天台山に遊ぶ賦」の受容

杉山 伊由

太宰治「葉桜と魔笛」論

喜多 彩

『本朝神仙伝』における橘正通の伝承について

松浦 琴音

幸田露伴「太郎坊」論

鈴木 玲美

菅原道真の詩における白色について

山尾 若菜

—夫婦に語らせて描く過去への思い—

国語学

若者言葉とSNSの関連性

— Twitterから見る省略語 —

山本 佳代

歌詞の表現特性 — ジャニーズのアイドルグループ —
平成の流行歌における日本語

中農麻菜美
藤原 佑華

観光ポスターにおけるキャッチコピーの表現特徴
ニュース見出しにおける体言止めと助詞の省略

堀井 美月
三宅 志音

大蔵流狂言におけるオノマトペ考察

— 能との比較を基に —

白井 美稀

— 新聞とテレビ番組から —
大阪弁に対して「先入観」を持つ要因

宮本 真衣

カタカナ語について

— 平成一年から令和一年に推薦された絵本を対象に —

奥井 千晶

— 大阪弁のアンケート調査 —
漫画におけるオノマトペの特徴と役割

明賀 萌子

日本語と手話 — 「写像」が生み出すことば —

北澤 奈美

— 『ジョジョの奇妙な冒険』から —
「名前ランキング」からみる名前の変遷

漫才における「ツッコミ」と多様性の関係

小林 舞花

山本 知佳

落語のオノマトペ — 上方落語と江戸落語の差 —

佐野 葵

現代の上方落語における補助動詞「クサル」の野卑度

子どもの名付けについて

白井 佑佳

小口美代子

— キラキラネームの意識調査と共に —

キラキラネームについて
喫煙を意味する動詞の変遷

河内 緑

歌詞における季節表現

千田紗友香

J-POP歌詞から見る二人称代名詞の変遷

呉屋 享美

— 一九八〇年から二〇一九年の楽曲を通して —

— つんく♂作詞曲を通して —
小林賢太郎の言葉と笑い

澤 侑璃

富山県呉西地区の方言 — アンケートの結果をもとに —

高多 悠加

「猿も木から落ちる」と「弘法にも筆の誤り」の比較

田中 美羽

歌詞における気象表現

高畑 史佳

「女子力」の変遷 — 解釈と使用実態の異なり —

西村 美鈴

— Mr.Childrenの楽曲における —

ニックネーム生成における音声効果

橋本 渚沙

— 女性アイドルにおいて —

中西 未来

小林製菓のネーミングはどのような特徴を持つのか

橋本 渚沙

— 外来語に頼らない姿勢 —

「若者言葉における「る言葉」の一般化の傾向について 藤井 千園

— 平成から令和に至るまで —

「お祈りメール」における表現の考察 山岡奈々美

— 手紙文との関連性 —

お笑い芸人東京03のコントにおける言語的特徴 山中 茄凜

九十九髪から付喪神へ 渡邊 良香

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。
- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。
- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個

人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

池原陽斉・坂本信道・小山順子・川島朋子・大谷俊太

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果四点が掲載となりました。

普賢保之先生のご退職に伴い、先生ご本人を始め、ゆかりの深かった方々に原稿をお寄せいただきました。ありがとうございます。

優秀論文発表会で発表し、卒業論文の要旨および卒業論文体験記を寄せて下さった卒業生の方々、忙しい中、時間を割いていただきほんとうにありがとうございました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(坂本・中西)